

議論下の疑問 (QUD)に関する不一致の修復と コミュニケーションの継続

Repair of disagreements regarding the question under discussion (QUD) and continuation of communication

山森 良枝

Yoshie Yamamori

同志社大学

Doshisha University

yy080707@gmail.com

概要

言語行為モデルに文脈の首尾一貫性を求める Roberts (2012) がある。しかし、日本語会話では質問への否定的回答に発話命題の真理条件ではなく帰属文脈の修正を求めるメタ言語否定のみが可能ながあり、文脈が発話に即して変化しうることが示唆される。

本研究では、言語行為の目的は首尾一貫した談話文脈の更新ではなく対話者の局所的な談話文脈の update にあることをメンタル・ファイル理論を使って提示する。

キーワード 議論下の疑問(question under discussion: QUD),
メタ言語否定, 局所的な文脈の修復, メンタル・ファイル理論

1. はじめに

協調的コミュニケーションでは、「会話/談話参加者間で共有されていると認識されている命題の集まり」と Stalnaker (2014) が規定する共通基盤/共通知識 (common ground: 以下 CG) 及び CG に関連する会話場で形成される、CG に属する命題が真となる〈世界の集合〉 (context set: 以下 C) に即して発話が理解される。そのため、CG/C に含まれない情報は、談話の一貫性・関連性を損なう、というのが意味論の定説である。Bach & Harnish (1979) が、CG/C を「話者と聴者は[互いが互いに P を信じている] ことを信じている] ことを信じている」という高階の相互信念 (mutual belief) として同定しているように、CG/C は“コンテキスト内の情報は全て参加者に公開されている/全ての参加者が当該情報に平等・確実にアクセスできる”「文脈情報の公開性」という特性をもつ (Harris, 2020)。それに対して、他者が平等・確実にアクセスできない内心の思考や信念は、CG/C に含まれ得ない情報として分類され、談話の一貫性・関連性を阻害する要因と見なされる。

コミュニケーションが成立するためのパラダイム・

ケースは、主張 (assertion)、質問 (question)、要求 (request) の 3 つである。よく知られた言語行為モデルに、質問・疑問が談話の流れに制約をかけるとする Roberts (2012) の「議論下の疑問 (question under discussion: QUD)」がある。QUD では、質問/疑問は情報の真理条件に影響を与えないものの、Stalnaker の CG/C を背景に、質問/疑問 (答えの集合) への回答として p (assertion) が選択され、対話者に受理されれば、p が CG/C に付加され、同時に、p の代替命題が C から削除されて、C の update が完了する。しかし、(CG/C をベースにした) QUD のようなモデルには、他者が共有できない (CG/C によって伴立され得ない) 内心の思考や信念に帰属する命題情報に対して、どのような対応策があるのかは自明ではない。QUD では、CG/C の一貫した関連性を保持するために、(変項の値を先行文脈に求める「照応解決」のように) 質問命題とその答え p だけでなく p の代替命題も (p が付加される以前の) CG によって伴立され得るものでなければならない。そのため、QUD について会話参加者の意見が一致しない場合、コミュニケーションは失敗に終わることになる。ところが、実際には、そのような場合でも会話を続けることができるだけでなく、CG や C に含まれ得ないはずの内心の思考や信念に関する情報も日常会話では談話からはみ出ることなく使用されている。

本研究では、コミュニケーションを成功させるための言語行為として、日本語の主張 (assertion) と質問 (question) に焦点を当て、会話参加者の意見が一致しない場合を観察してみると、質問への否定的回答には述語否定が使用できずメタ言語否定 (metalinguistic negation (Horn, 1985)) のみが容認されることに着目する。メタ言語否定は対話者の発話命題の真理条件ではなく帰属文脈の適切さへの異議申し立てであり、修復を示唆することから、コミュニケーションを成功に導く言語行為の目的は、(共有知識として首尾一貫した)

CGのupdateというよりも、むしろ、発話に即して変化しうる局所的な談話文脈のupdateにあるように思われる。以下では、局所的な談話文脈のupdateとシフトについて考察する。

2. 現象

(1)(2)は同じ肯否疑問文を含む。通常、肯否疑問文に答える場合、肯定文もしくは否定文のどちらを使って問題はない。ところが、(2b)はこの原則が適用されない例である(谷口, 2024)。

- (1) (市役所で、家族構成に関するアンケートを、職員が、Bに代わって記入している)
- a. 職員: えーっと、次の質問項目ですが、
弟さんは今、社会人ですか?
- b. B: いえ、社会人じゃないです (述語否定)
(# いえ、社会人なのではないです/
社会人ではないのです) (メタ言語否定)
- (2) a. A: 久しく会ってないですが、
弟さんは、もう社会人ですか
- b. B: #いえ、社会人じゃないです (述語否定)
(いえ、まだ学生です)
(いえ、社会人なのではないです/
社会人ではないのです) (メタ言語否定)

(2b)は否定文が(2a)に対する答えとしては使えないことを示している。(1b)との対比から、否定文が答として適切に解釈されるかどうかは、(1a)と(2a)の肯否疑問文の特性によって決定されることが分かる。まず、(1a)では「弟は社会人だ」(P)はアンケートの項目として職員と聴者Bの両者に認識されている。一方、(2)ではPは質問者Aの信念世界に属する情報である。話者Aの信念世界の作用域内の情報に述語否定が使えないという事実から、メタ言語否定がAの志向する文脈/前提へのBの不同意を表現する手段として使用されていると考えることができる。このことは、(3a, b)のメタ言語否定が、(2a)では使用できるのに対し(1a)ではできないという事実からも確認できる。

- (3)a. いえ、社会人なのではないです
b. いえ、社会人 じゃないん (の)です

(3a)では「の」が補文節を形成する。そのため、「の」節内の「社会人だ/です」が節外に位置する「ない」の作用を受けることはない。ここでは、名詞化の働きをもつ「の」に「だ」が接続され、(助動詞の)「のだ」が形成されているのだが、「のだ」は、「聞き手が認識してい

ない(「の」節内の)事態を認識させようとする話し手の態度」を表す「提示」の機能を持つ(『現代日本語文法4』p. 195)。従って、文末に「のだ」が生起する(3b)でも「の」節が「聞き手が認識していない事態を認識させようとする話し手の態度」を提示する役割を担い、疑問命題の述語「(弟さんは) 社会人です」が否定の焦点になることはない。そもそも、日本語の否定辞「ない」のスコープは直前の動詞、形容詞、Xダ/デスに限られる、というのがデフォルトである(久野, 1983:140)。しかし、「(こんなものは)料理じゃない」や「He didn't call the [po'lis], he called the [poli's].」のように、「こんなものでも料理だと思う」相手の前提やアクセント等への異議申し立てを表す否定の用法が「メタ言語否定」であり(Horn, 1985)、(3a, b)はその一例である。従って、メタ言語否定の使用に関する(1)と(2)のコントラストは、眼下の発話(命題)pについて会話参加者の評価が一致しない場合、コミュニケーションを成功に導く言語行為のターゲットが、pの真理条件やCG/Cのupdateではなく、p(の前提)の文脈のupdateやその修復にあることを示唆している、と考えることができる。ここで大切なことは、命題の前提/帰属文脈の修復がコミュニケーションの継続を可能にする方略であり得るとすれば、談話文脈も首尾一貫したのではなく発話に即してシフトし得る、という点である。そこで、次のセクションでは、文脈のシフトについて反事実条件文を手がかりに考察する。

3. 真理関数的条件文と反事実的条件文における context set とそのシフト

命題と文脈との関係をはっきりさせるために、Fintel(1998)に即して、通常真理関数的条件文と反事実的条件文の前件命題とCG/Cの関係を調べ、両者の関係に関して前者について言えるほぼ同様のことが(CG/Cの一貫性を前提とした)QUDモデルについて成り立ち、後者について言えるほぼ同様のことが(CG/Cの一貫性が損なわれた)(2)の場合のpとその(局所的な)帰属文脈との関係について成り立つことを示す。標準的な分析によれば、(4)のような真理関数的条件文は、(5)のように、if節が世界を量化する潜在的な量化子を制限する構造を持つ(von Stechow, 1998)。

(4) If it rains, you will get wet.

(5) A bare conditional if p, q has the logical form $\forall D$ (if p) (q).

If defined, it is true in a world w if all worlds w' in $D(w)$ such that $p(w')$ are such that $q(w')$: $p \cap D(w) \subseteq q$.

(D is a function that assigns to any world w a set of accessible worlds.)

If p , q が真であるのは、全ての p -worlds w' が q -worlds である場合に限られる。この場合、(4)のような真理関数的条件文は前件 p と整合的な文脈でのみ適切であり (cf. (6))、会話では(7)のように全ての p -worlds が現行の context set C に含まれることになる。

(6) $p \cap D(w) \neq \emptyset$ (7) $p \cap D(w) \subseteq C$

一方、(8)のように前提が現実とは異なる事象を表す反事実的条件文は、(9)の通り context set C が p -worlds を含まない場合の世界に関してのみ後件が成立する。

(8) If it rained, you would get wet.

(9) $p \cap D(w) \not\subseteq C$

反事実的条件文は、(9')のように、 C の外側にある少なくとも幾つかの p -worlds が存在するだけでも成立する、と Fintel は述べている。

(9') subjunctive: possibly [$p \cap D(w) \not\subseteq C$]

以上の分析を、QUD モデルが成立する(1)の場合および成立しない(2)の場合と対比すると、条件文の前件が成立する世界/文脈が全て C に含まれる真理関数的条件文と前者の間に、また、前件が成立する世界/文脈 (のいくつか) が C に含まれない反事実的条件文と後者の間に、当該命題と C の関係に関するパラレリズムが存在することが見て取れる。重要なことは、発話の内容によって措定される発話命題の帰属文脈も変化し得る、という点である。つまり、命題の前提/帰属文脈の修復がコミュニケーションの継続を可能にする方略であり得るとすれば、談話文脈も首尾一貫したものではなく発話に即してシフトし得る、ということである。この状況は(10)のように略記できる。

(10) $\times p \cap D(w) \subseteq C \rightarrow p \cap D(w) \not\subseteq C \rightarrow p \cap D(w) \subseteq C$
そして、 C から C' へのシフトは、その遡及的効果として談話文脈の update を引き起こす。

ただ、Fintel (1998) では C は可能世界/命題の集合である。可能世界意味論では、あらゆる可能世界において命題の真偽がトップダウン的に決定される。可能世界の集合は命題の集合でもあるので、命題は世界全体に適用される条件と同一視される。そのため、個々人の局所的な文脈においてどのような情報が成立し得るのか、について個別に調べることはできない。そこで、§4では、個々人が志向する局所的

な文脈と発話内容の組み合わせによる指示対象と解釈の問題を取り上げる。

4. De dicto vs. de re : Double Vision パズル

Quine (1956) に現れる (11) の発話は (12) と (13) の 2通りに解釈ができる。

(11) Ralph believes that Orcutt is a spy.

(12) Ralph believes that there is a spy called Orcutt.

(13) Orcutt is such that Ralph believes that s/he is a spy.

その違いは存在量化詞のスキープの違いとして捉えることができる。(12)は(12')のように、存在量化詞が believe のスキープ内に生起する狭いスキープを持つ。

(12)' Ralph believes: $\exists x(x: \text{Orcutt})(x \text{ is a spy})$

一方、(13)は、(13')のように、存在量化詞が believe を超えて、そのスキープ内の変項を束縛する広いスキープを持つ。

(13)' $\exists x(x: \text{Orcutt})(\text{Ralph believes that } x \text{ is a spy})$

(12)/(12')は de dicto (言表様相)、(13)/(13')は de re (事象様相) の解釈を表わす。前者では補文命題の真偽は未確定だが、後者では(14)も(15)も真になるという Double Vision パズルが生じる。

(14) Ralph believes that Orttcutt is a spy.

(15) Ralph believes that Orttcutt is not a spy.

(13')の de re では Orttcutt が believe より広いスキープを取る。つまり、Ralph が(13')の”Ralph believes that x is a spy”に関わる証言をした際、Ralph 自身が Orttcutt という記述を実際に使ったかどうか分からない場合、Ralph は証言では a someone と言ったが、(11)の話者がその人物が Orttcutt であることを知っていて、Ralph の発話を言い換えた可能性があるといったことである。しかし、(14)と(15)が両立可能な世界はない。自分がどの世界にいるのかを知るためには、現実世界で真である全ての命題だけを識別できる立場にいる必要があるが、それは無理なので、(14)(15)が両立するとすれば、それは以下のような場合である。

(16) Ralph believes that the man in a brown hat is a spy; and the man in a brown hat is Orttcutt.

(17) Ralph believes that the man at the beach is not a spy; and the man at the beach happens to be Orttcutt.

つまり、Orttcutt の指示対象が実際に存在し、かつ、

Ralphが補文の命題内容を信じている(de se 解釈の場合である。Double Vision のシナリオでは、Ortcutt は believe 補文の外で de re として解釈される一方、Ralphの信念世界では the man in a brown hat と the man at the beach は同じ人物ではないと考えられている。同じ問題は(1)(2)でも生じる。(1)の質問命題「弟さんは社会人だ」は参与者間の現実世界の共有情報であるため「弟さん」も「社会人だ」も de re として解釈される。他方、(2)の質問命題の「弟」は現実世界に指示対象を持つので de re として解釈されるが、「社会人だ」はAの信念世界内の情報として de dicto の解釈を持つという Double Vision パズルが生じる。述語否定が認可されるのは「社会人だ」が de re の場合だが、de re 解釈の名詞句は指示対象が現実世界に存在するので、(CGによって指示対象が伴立される) QUD モデルとの親和性が高い。一方、believe の補文内に留まり de dicto の解釈を持つ信念情報は (CGには含まれ得ないため) QUD モデルでは扱えない。この Double Vision が言語行為モデルとしての QUD の躓きの石である。そこで、§5では、メンタル・ファイル理論を参照して、de re 解釈の名詞句が表す個体とその個体に関する de dicto 情報を区別し、局所的文脈をファイルに置き換えた談話文脈のモデル化について検討する。

5. メンタル・ファイル

メンタル・ファイル理論(Perner et al., 2015)は、物体が特定の概念の下で概念化されていることと、その物体について人が持っている情報を区別することによって、サイコロのような消しゴムを使った信念テストにおける子供の奇妙な反応パターンなどを説明する。ファイルには「消しゴム」のような見出しが付けられ、エージェントが持つ消しゴムの情報を記録した「通常ファイル」の他に、他のエージェントの追跡している物体に関する情報を記録した「代理ファイル」があり、代理ファイルを使って別のエージェントの世界に対する見方がモデル化されている。メンタル・ファイルのアイデアを換骨奪胎し、冒頭の(1)(2)に現れる「弟」の見出しを持つ単純なファイルを考えてみよう。(1)では「弟」はアンケートの調査対象であり、調査項目だけが記録された(18)のような通常ファイルが職員と B に共有されていると考えられる。

(18) [弟 | 学生 or 会社員 or 公務員]

一方、(2)では A と B それぞれに(19)のような通常フ

ァイルがあり、最初、これらはリンクされていない(情報共有はない)と考えられる。そして、Aの発話後、Bによって、Aの発話内容を記録した代理ファイルが作成されるが、このファイルはエラーとして処理される、と同時に、Aにより、メタ言語否定を使ったBの通常ファイルの修正が行われると考えられる。

(19) 通常ファイル 代理ファイル

A: [弟 | 社会人]

B: [弟 | 学生] ⇒ ×[弟(A) | 社会人]

6. おわりに

本稿では、質問への否定的回答に発話命題の真理条件ではなく帰属文脈の修正を求めるメタ言語否定のみが可能な場合に着目し、文脈が発話に即して変化しうる談話モデルの可能性について議論した。これに付随して、言語行為の目的は首尾一貫した談話文脈の更新ではなく対話者の局所的な談話文脈のupdateにあることを主張し、メンタル・ファイル理論を援用した局所的な文脈のモデル化の可能性について検討を行った。

謝辞. 本研究は科学研究費基盤研究 C (課題番号 25K04053)による支援を受けている。

参照文献

- [1] Bach, K., & Hamish, R. (1979) *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge: MIT Press.
- [2] von Stechow, Kai. 1998. The presupposition of subjunctive conditionals. (Percus, O. and U. Sauerland eds.) *MIT Working Papers in Linguistics* 25.
- [3] 『現代日本語文法 4』日本語記述文法研究会 [編] (2003) 東京:くろしお出版.
- [4] Harris, D. W. (2020) We talk to people, not contexts. *Philosophical Studies* 177: 2713-2733.
- [5] Horn, L. R. (1985) Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. *Language* 61: 121-174).
- [6] 久野すずむ(1983) 『新日本文法研究』東京:大修館書店.
- [7] Perner, J. et al. (2015) Mental files and belief: A cognitive theory of how children represents belief and its intensionality. *Cognition* 145:77-88.
- [8] Quine, W.V.O (1956) "Quantifiers and propositional attitudes", *The Journal of Philosophy* 53(3): 177-187.
- [9] Roberts, C. (2012) Information structure in discourse: Toward an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics* 5 (pp. 1-69).
- [10] Stalnaker, R.C. (2014) "Pragmatic presuppositions", M. Munitz and P. Under (eds.) *Semantics and Philosophy*. New York: New York University Press: 197-213.
- [11] 谷口洋志 (2024) 「日本語コピュラ文の出現環境とその動機について」京都大学修士論文.